

- 1 派遣期日 平成 29 年 10 月 27 日 (金)
- 2 研修先 学校名 (会場名) 千葉県習志野市立大久保東小学校
所在地 千葉県習志野市大久保 2-12-1
<http://www.nkc.city.narashino.chiba.jp/daitou>

- 3 研修内容
第 37 回国語科公開研究会
研究主題

思考し表現する力を育む国語科学習
— 主体的な読みにつながる指導の工夫 —

(1) 研究への取り組み

大久保東小学校では、昭和 53 年度から国語科の研究を進め、教材を説明的文章に絞り、より具体的で深まりのある国語科研究を目指している。研究を進める中で、「学習者自らの興味や問題意識に根ざした課題解決」の手立てが弱く、主体的に読もうとする姿勢や進んで交流活動に向かおうとする意欲を十分に育むことができないという課題がでてきた。そこで、昨年度から子どもたちが、自ら「問い (疑問)」をもちながら文章を読み解いていく単元づくりに取り組み始め、本年度も継続して進めている。

(2) 授業の実践 (4 学年授業を参観)

単元名「訴えられた！絶滅危惧種と法廷バトル ～「絶滅危惧種ファイル」を作ろう～」

今回の単元は、説明文で指導要領 3・4 年「C 読むこと」の指導事項エ・オを受けて設定している。教科書の教材文「ウミガメの命をつなぐ」(教育出版 4 年下)だけでは、子どもたちが主体的に細かいことに気をつけながら文章を読み、考え、発表を通して一人一人の感じ方の違いを気づくことが難しい。そこで、導入において「絶滅危惧種救出裁判ファイル」(実業之日本社 大淵希郷著)という市販されている本を教材として使用し、「もし絶滅危惧種が人間を相手に裁判を起こしたら、神様はどんな判決を下すだろうか」という設定で学習材に出会う。今回使用した資料



せる。そこから教科書の教材文を並行して読み進め、個々の「絶滅危惧種救出裁判ファイル」を作るという言語活動を行う。人間が絶滅しそうな動物たちに訴えられて裁判になった、といくつかの例を紹介し、ウミガメも絶滅危惧種であることを伝えて教材文を読む。もしウミガメに訴えられたら教材文の中の水族館の飼育係は裁判で何と弁明するのか、また神様は何と判決をするのかを一人一人が個々の力で考え書き進める。

4 学年 3 学級の授業を参観し、それぞれ学級が同単元 (10 時間扱い) の第 3 次、第 5 次、第 8 次を授業を展開した。

① 4 年 3 組 (第 3 次)

第 3 次では教科書の教材文を読んで、弁明文にどの部分を使うか必要な箇所を全体で考えるという授業であった。教科書本文から大事なところを探し出し、線を引く。「チャレンジタイム」という自分一人の力で取り組む時間を設け、その後教師に質問をしたり、友人に聞いたりするなどの時間の取り方に工夫が見られた。また、一斉に確認を進める内容が活動計画として具体的に板書され、早い児童は次の要約に取り組むなど、それぞれが見通しをもち、目的意識をもって意欲的に取り組む姿が見られた。

② 4 年 2 組 (第 5 次)

第5次では、被告となる人間の弁明文を限られた字数（150字）でまとめるという授業であった。第4次からの続きとなり、一人一人の進度によって、「弁明文を書く」「友だちと読み合う」「弁明文に付け足す資料を選ぶ」とそれぞれであった。そこで、黒板にネームプレートを活用し、現在の状況の所にネームプレートを置くことで、それぞれの進度を教師が確認したり、友だち同士で読み合う時に利用したりしていた。また、1教室の中で話し合うコーナー、資料を選ぶコーナー、文章を推敲するコーナーを設けて、それぞれの作業が集中して作業できるような工夫もなされていた。



前回の弁明文を読み直して書く



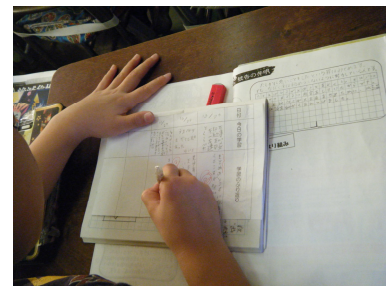
指定されたスペースで友だちと読み合う



弁明文に付け足す資料を選ぶ

③ 4年1組（第8次）

第8次は立場を神様にかえて、神様の判決と判決文を書く授業であった。判決文を書くにあたって、必要に応じて第5次同様に話し合うコーナーを設けていた。意見交換をしている児童の会話の中には、「自分は有罪にしたんだけどどう思う？」「この書き方、分かりにくいからこうした方がいいんじゃない？」などと言った言葉が交わされ、子どもたちの間でしっかりと話し合いがなされていた。また、授業の終末に授業の振り返りをあらかじめ観点を板書して行うことで、より踏み込んだ振り返りができていた。



振り返りを記入する様子

（4）分科会

分科会講師の大木圭先生（千葉大学教育学部附属小学校副校長）の指導助言としては、「自分で考え要約することが、今回のキーワードであり、今回の単元においては児童一人一人が「主体的な読み」がしっかり取組まれていた。」「今までは教科書を主として進めることが多かったが、これからは教科書は主ではあるけれども、資料（ツール）を多に利用し、児童が主体的に読み進め、問題に迫ってけるような手立てをこれからは教師側が考えていかなければならない。そういった意味からも今回の授業は一つの提案としては大変参考になるものである。」と話をされていた。

4 感想

全学年の教室には発表の仕方の掲示、廊下の掲示には国語科コーナーが設置され、学年ごとに簡単な文作りや、要約、テーマについての意見文など、朝自習等に全体で取り組んでいる課題が掲示されていた。国語の授業のみならず、普段から文章を読むこと書くことを積極的に行うことが、今回参観した、意欲的に文章を読んだり、書いたりする児童の姿につながると感じた。長年にわたり国語科の研究を進めてきている活動が随所に見られ、参考になった。

また、今回教科書の本文を読んで進める今までのやり方の枠を超えた進め方に驚き、興味深く参観できた。また、マグネットのネームカード用いた進捗状況の確認、一つの教室の中でも作業するスペースを分けて、それぞれが集中する環境をつくる工夫、ふりかえりカードの取り組ませ方など、ちょっとした工夫一つ一つがよく考えられていると感じた。児童の実態に合わせて目標とする力をつけさせるために、今できる最大限でどのような手立てをとっていくか。教師側の手立ての重要性を感じた。一つの枠にこだわらず、これからも研鑽を積み、子どもたちが学ぶことが楽しいと思えるような授業をこれからも目指していきたい。